

正 誤 表

「エッセンシャル・キネシオロジー原書第3版（電子書籍付）（第1刷）」

下記の箇所に関りがございました。謹んでお詫びし訂正いたします。

頁	該当箇所		誤	正
23	左段	↑2-最終行	髄管 medullary canal (<u>空洞</u>)	髄管 medullary canal (<u>髄腔 medullary cavity</u>)
26	左段	14 行	<u>骨膜</u> 関節	<u>滑膜</u> 関節
42	左段	5 行	筋群の	筋 <u>節</u> の
43	左段	↑9 行	<u>最初の自動的な力の生産者である</u>	<u>主要な自動的な力を産生する</u>
45	左段	5 行	下肢と体幹から <u>生産</u> された	下肢と体幹から <u>産生</u> された
		↑5 行	最大限に <u>伸展</u>	最大限に <u>伸長</u>
49	右段	↑20-↑19 行	同時に硬くなるのは、どの組み合わせか、	同時に硬くなる <u>と</u> 、制限を受けるのは、どの組み合わせか、
50	左段	↑5-↑3 行	筋を伸張する <u>か</u> 、または最大限に伸ばすためには、 <u>筋はその作用すべてと反対側の肢位に位置しなければならない。</u>	筋を伸張する、または最大限に伸ばすためには、 <u>その動きと反対側の肢位に筋を位置させる必要がある。</u>
51	左段	↑6 行	上腕骨に <u>関与する</u> 4つの	上腕骨で <u>構成される</u> 4つの
54	右段	3 行	可動 <u>で</u> あり、	3 可動性 <u>が</u> あり、
55	左段	↑4 行	可動 <u>で</u> ある。	可動性 <u>が</u> ある。
	右段	↑6 行	鎖骨の <u>挙上</u> と	鎖骨 <u>挙上</u> と
	図 4.8	タイトル	右胸鎖関節での <u>肋骨</u> の運動	右胸鎖関節での <u>鎖骨</u> の運動
56	左段	↑6 行	肩甲胸郭関節の運動と <u>して</u> は	肩甲胸郭関節の運動とは

		↑5 行	肩甲骨の運動を <u>示す</u> 。	肩甲骨の運動を <u>指す</u> 。
61	コラム左段	6 行	(母指は上を <u>指す</u>)	(母指は上を <u>向く</u>)
69	右段	3-4 行	胸郭から離れて持ち上がっている <u>肩甲骨の内側縁が</u>	<u>肩甲骨の内側縁が</u> 胸郭から離れて持ち上がっているのが
71	右段	右段 2 行	肩甲上腕関節の運動 <u>であると</u>	肩甲上腕関節の運動と
86	表 4. 1		[①に差し替え]	
	左段	↑14-↑13 行	関節可動域測定 <u>法</u> において参考 <u>に</u> される。	関節可動域測定で <u>参照</u> される表である。
98	表 5. 1	1 段目左から 3 つ目のコラム	<u>正常</u> 可動域	<u>参考</u> 可動域
108	右段	18 行	<u>通常</u> ，神経系は	<u>また</u> ，神経系は
		↑12-↑11 行	肩の屈曲が <u>複合</u> される。	肩の屈曲が <u>協働</u> して起こる。
113	右段	11-12 行	関節可動域測定 <u>の一般的な方法をまとめたものである</u> 。	関節可動域測定で <u>参照される表</u> である。
	表 5. 2		[②に差し替え]	
117	右段	↑8 行	関連している <u>のである</u> 。	関連している。
122	左段	4 行	可能性が <u>あり</u> ，	可能性が <u>ある</u> 。
123	左段	↑11 行	第 3 中手骨の間 <u>での</u>	第 3 中手骨の間の
128	左段	15 行	理解 <u>される</u>	理解 <u>できる</u>
129	左段	↑18 行	<u>共同</u> が必要	<u>協働</u> が必要
132	表 6. 2	タイトル	手関節の関節可動域	手関節の関節可動域 <u>測定</u>
		1 段目左から 1 つ目のコラム	<u>動作</u>	<u>運動</u>
138	左段	11 行	<u>ほとんど</u> すべての	<u>ほぼ</u> すべての

147	表 7. 1	1 段目右から 2 つ目のカラム	<u>関節可動域</u> （解剖学的肢位 <u>から</u> ）	<u>参考可動域</u> （解剖学的肢位 <u>で</u> ）
170	左段	6 行	あるいは高齡化による	あるいは高齡による
172	右段	↑2 行	<u>接続</u> する.	<u>連結</u> する.
174	右段	↑10-↑9 行	表 8. 1 と <u>並行</u> し,	表 8. 1 と <u>ともに</u> ,
181	表 8. 3		〔③に差し替え〕	
186	左段	5-6 行	<u>関節可動域</u> は,	<u>参考可動域</u> を
	表 8. 4		〔④に差し替え〕	
	表 8. 5		〔⑤に差し替え〕	
202	右段	最終行	股関節の <u>伸展筋</u> の	股関節の <u>屈筋</u> の
209	コラム左段	8 行	軸骨格を曲げる	軸性骨格を曲げる
213	左段	5-6 行	<u>関節可動測定についてまとめられている.</u>	<u>関節可動測定で参照される表である.</u>
214	表 8. 12		〔⑥に差し替え〕	
230	左段	↑5 行	<u>正常な可動域</u> は,	<u>参考可動域</u> を,
	表 9. 1	1 段目左から 2 つ目のカラム	<u>正常可動域</u> （ <u>角度</u> ）	<u>参考可動域</u> （ <u>自動</u> ）
		1 段目左から 3 つ目のカラム	回旋軸	回転軸
253	右段	↑5 行	表 9. 4 に, 股関節の <u>正常な関節可動域を示す.</u>	表 9. 4 は, 股関節の <u>関節可動域測定で参照される表である.</u>
254	表 9. 4		〔⑦に差し替え〕	
270	表 10. 2	1 段目右から 1 つ目のカラム	<u>正常可動域</u>	<u>参考可動域</u> （ <u>自動</u> ）

286	表 10. 7		〔⑧に差し替え〕	
	左段	1-2 行	角度測定で <u>使うことができる.</u>	角度測定で <u>参照される表である.</u>
305	表 11. 4	1 段目左から 3 つ目のカラム	<u>正常可動域</u>	<u>参考可動域 (自動)</u>
326	コラム右段	↑4-↑3 行	関節可動域に <u>関する一覧表</u>	関節可動域 <u>測定で参照される表</u>
	表 11. 10		〔⑨に差し替え〕	
350	右段	5 行	前 <u>方面</u> から	前面から
351	右段	↑9-↑8 行	この <u>突出した構造</u> は	この <u>顕著な構造</u> は
357	コラム左段	↑11-9 行	一部の人は、 <u>下顎を前方に引き出すことにより、TMJ に対する負荷を軽減させるために機能する外側翼突筋における、疼痛を伴うスパズムを経験する.</u>	一部の人は <u>外側翼突筋に疼痛を伴うスパズムを経験することがあるが、それは下顎を前方に引き出すことで TMJ への負荷を軽減させる自然な防衛メカニズムとして役立っている可能性がある.</u>
		↑4 行	永続する痛み <u>の病的代謝</u> を	永続する痛み <u>を伴う病的機構</u> を
363	左段	↑7-↑5 行	胸腔内容積 <u>の変化という共通の働きをすることによって</u>	<u>同様に胸腔内容積を変化させることで</u>
369	左段	17 行	筋が <u>生産</u> する	筋が <u>産生</u> する
371	右段	11 行	内力が <u>生産</u> する	内力が <u>産生</u> する

①

表 4.1 肩関節の関節可動域測定

運動	回転軸	基本軸	移動軸	参考可動域 (自動)
屈曲	上腕骨大結節	胸郭正中線	上腕骨大結節－上腕骨外側上顆	180°
伸展	上腕骨大結節	胸郭正中線	上腕骨大結節－上腕骨外側上顆	50°
外転	上腕骨小結節	胸骨に沿って	上腕骨小結節－上腕骨内側上顆	180°
内転	上腕骨小結節	胸骨に沿って	上腕骨小結節－上腕骨内側上顆	0°
内旋	尺骨肘頭突起	垂直(重力に沿って)	尺骨茎状突起	70°
外旋	尺骨肘頭突起	垂直(重力に沿って)	尺骨茎状突起	90°

②

表 5.2 肘と前腕の関節可動域測定

運動	回転軸	基本軸	移動軸	参考可動域(自動)
肘				
屈曲	上腕骨外側上顆	上腕骨正中線(肩峰を通る)	上腕骨外側上顆－橈骨茎状突起	140～145°
伸展	上腕骨外側上顆	上腕骨正中線(肩峰を通る)	上腕骨外側上顆－橈骨茎状突起	0～5°の過伸展
前腕				
回外	尺骨頭付近の空間軸	上腕骨平行線	遠位橈骨と尺骨の前面	80～90°
回内	尺骨頭付近の空間軸	上腕骨平行線	遠位橈骨と尺骨の後面	75～80°

③

表 8.3 頭頸部の関節可動域測定*

関節あるいは部位	屈曲と伸展(矢状面での角度)	軸回旋(水平面での角度)	側屈(前額面での角度)
環椎後頭関節	屈曲：5° 伸展：10° 計：15°	わずか	約5°
環軸関節	屈曲：5° 伸展：10° 計：15°	35～40°	わずか
頭部内の領域 (C2～C7)	屈曲：35～40° 伸展：55～60° 計：90～100°	30～35°	30～35°
頭頸部全域	屈曲：45～60° 伸展：75～80° 計：120～130°	65～75°	35～40°

* 水平面、および前額面の運動は、片側の可動域のみを表示している。各可動域は複数のデータから編集しており(本文参照)、被験者間の個体差が含まれている。(Neumann DA: Kinesiology of the musculoskeletal system: foundations for physical rehabilitation, ed 2, St Louis, 2010, Mosby, Table 9.7 より)

④

表 8.4 胸部の参考可動域

屈曲と伸展 (矢状面での角度)	回旋 (水平面での角度)	側屈 (前額面での角度)
屈曲：30～40° 伸展：20～25° 計：50～65°	30～35°	25～30°

(Neumann DA: Kinesiology of the musculoskeletal system: foundations for physical rehabilitation, ed 2, St Louis, 2010, Mosby, Table 9.8 より)

⑤

表 8.5 腰部の参考可動域

屈曲と伸展 (矢状面での角度)	回旋 (水平面での角度)	側屈 (前額面での角度)
屈曲：40～50° 伸展：15～20° 計：55～70°	5～7°	20°

(Neumann DA: Kinesiology of the musculoskeletal system: foundations for physical rehabilitation, ed 2, St Louis, 2010, Mosby, Table 9.9 より)

⑥

表 8.12 頸部の関節可動域測定

運動	回転軸	基本軸	移動軸	参考可動域(自動)
屈曲	耳朵	垂直線(重心線)	鼻の基部へ伸びる線	50°
伸展	耳朵	垂直線(重心線)	鼻の基部へ伸びる線	60°
回旋	頭頂の中央点	左右の肩峰を結ぶ線に対する平行線	鼻梁に沿う線	80°
側屈	C3～C4 棘突起付近の固定されていない、いわゆる "Floating axis"	胸椎棘突起に沿う垂直線	後頭を通る正中線	40～45°

⑦

表 9.4 股関節の関節可動域測定

運動	回転軸	基本軸	移動軸	参考可動域(自動)
屈曲	大転子	骨盤の正中線(側面)	大腿骨外顆	120°
伸展	大転子	骨盤の正中線(側面)	大腿骨外顆	20～30°
外転	上前腸骨棘	反対側の上前腸骨棘	膝蓋骨に向かう大腿骨の正中線	40°
内転	上前腸骨棘	反対側の上前腸骨棘	膝蓋骨に向かう大腿骨の正中線	20°
内旋	膝蓋骨の中間点、膝蓋骨上	垂直線(重力と平行線)	脛骨稜(脛骨の中心線)	35～45°
外旋	膝蓋骨の中間点、膝蓋骨上	垂直線(重力と平行線)	脛骨稜(脛骨の中心線)	45°

⑧

表 10.7 膝関節の関節可動域測定

運動	回転軸	基本軸	移動軸	参考可動域(自動)
屈曲	大腿骨の外側上顆	大転子までの大腿骨の長軸	外果	135～140°
伸展	大腿骨の外側上顆	大転子までの大腿骨の長軸	外果	0～5° (過伸展)

⑨

表 11.10 足関節の関節可動域測定

運動	回転軸	基本軸	移動軸	参考可動域(自動)
背屈	外果	腓骨頭を通る下腿の中心線	第 5 中足骨に平行な線	10～20°
底屈	外果	腓骨頭を通る下腿の中心線	第 5 中足骨に平行な線	50～60°
後足の回外(距骨下関節)	内外果間のアキレス腱上	後面の下腿中心線	後面の踵骨中心線	10～15°
後足の回内(距骨下関節)	内外果間のアキレス腱上	後面の下腿中心線	後面の踵骨中心線	0～5°

2025 年 2 月 25 日

株式会社南江堂